

# 秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成24年9月1日(第1220号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



絵／文 白澤 恵舟

## 「いこい」

ベトナムの名所ハロン湾。

海の桂林といわれる海上を大小の観光船が往来するが、ふと目を転ずると、

遙か遠くの島陰に鄙びた小船が、のんびりと憩っている。

この世の喧噪に埋もれず、家族仲良く午睡でもしているのだろうか。

観光船も、音をたてずに、静かに通って行って欲しくなる風景である。

## 国土交通省所管事業に係る要望活動

秋田県議会建設振興議員連盟(北林康司会長・以下、議員連盟)と秋田県建設業協会(村岡淑郎会長・以下、協会)は8月1、2日の二日間に亘り、国土交通省及び東北地方整備局に対して所管する

事業に係る要望活動を行った。

議員連盟から北林康司会長、大関衛幹事長、平山晴彦幹事、協会から村岡淑郎会長、北林一成副会長、加藤憲成

副会長、菅良弘副会長が参加し、初日、国土交通省及び東北地方整備局を訪問。また、二日目には秋田県選出国会議員のもとを訪ねた。

### [要望事項]

1. 高速道路ネットワークのミッシングリンク解消について
2. 日本海側拠点港としての秋田港の整備促進と能代港の拠点化形成への支援について
3. 大規模地震等に備えた防災対策の推進について
4. 観光による秋田の元気創出を支援する道路の整備推進について
5. 産業・生活を支える国道7号の整備促進について(下浜道路・秋田南バイパス)
6. 地域再生・都市再生に向けたまちづくり関連事業等の促進について
7. 河川改修事業及び砂防事業等の推進について
8. ダム建設事業の促進について



### 協会

## 若手経営者座談会開く

若年者の離職防止・技術継承等をテーマに

県協会では、8月29日(水)秋田ビューホテルにおいて、若手経営者座談会を開催した。

座談会には、各支部から推薦された若手経営者8名が参加し、座長は(一社)秋田県建設業協会の鈴木事務局長が務めた。

座談会に先立ち、座長である鈴木事務局長が「今回の座談会は昨年引き続き2回目となりますが、次世代を担う皆さんの意見を伺い、旬なテーマで共通認識を持つことが目的でありませう。協会の今後の事業にも生かしていきたい」と述べた。

参加者の自己紹介に続き、「若年者の離職防止、定着率のアップ」「技術・技能の習得・継承」「今後の建設業協会のあ

り様」をテーマに意見交換が行

われた。参加者からは、若年者の離職防止、定着について、「コミュニケーションや人間関係の悩みを相談できるように年齢が近い同僚が必要と考え新規採用時に同期を採用する等配慮している」という意見があった反面、「コンスタントな事業量・額の確保が難しく、計画的な採用まではほど遠く、どちらかという補足的な採用になっている」との声があった。

技術・技能の伝承については、「資格取得の際、会社で費用負担をしておき、資格取得後は給与に反映させている」という企業が多く、また「若者とベ



テランとのペアリングや可能な限り様々な現場を体験させることにより仕事を覚えさせる」との意見も挙げられた。

今後の建設業協会のあり様としては、「現在の入札契約制度のあり方が課題。単純に点数で評価せず、労務費の確保やコストの面から等、いろいろな手法についてこちら側から発注者へ提案していったらどうか」「技術は立派だが、マネジメントが弱い。公共事業にしっかりとした意見を物申すことが必要だ」という率直な意見が出された。

# 秋田県優良工事表彰受賞祝賀会

受賞者の栄誉を讃える



一般社団法人 秋田県建設業協会(村岡淑郎会長)と秋田県土木施工管理技士会(北林一成会長)は8月20日、秋田キャッスルホテルにおいて秋田県優良工事表彰受賞の企業及び技術者を招いて受賞祝賀会を開いた。

今年度の優良工事表彰においては、26件の工事を施工の31社が受賞。祝賀会においては、技士会会員の技術者27名に表彰状及び記念品、企業31社に対して表彰盾を贈呈した。

また、祝賀会には佐竹敬久秋田県知事、小松隆明県議会副議長をはじめ、多数の来賓が出席し、祝辞を述べ、受賞者の功績を讃えた。



## 下米町一丁目竿燈会 による竿燈披露

秋田竿燈まつり初日の8月3日、本会がスポンサーを務める下米町一丁目竿燈会による演技披露が秋田県建設業会館前駐車場で行われた。今年は近年にない猛暑ではあるものの晴天に恵まれ、絶好の竿燈日和となった。

(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

# 秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター  
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他  
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル  
写真塾・写楽 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.37

## 自噴露天風呂

小坂町某所



これは、小坂町中心部から青森県境に向かって北進した途中の山林内にある露天風呂である。自噴している湯つぼがそのまま天然の露天風呂になっている、おおよげにPRはされていないものの噂を聞きつけた野湯好きが全国からやってくる「隠れた名所」になっている。鉱脈を探してボーリングをしたら湯が湧き出したということらしい。

特に管理されている様子はないが、箕の子や湯桶などは個人の温泉愛好家を持ち寄ったものだろうか、体裁さえ気にしなければとりあえずタダでワイルドな露天風呂を楽しめるようになっていく。湯温はやや熱めだが、加温も加水もせずに人が入るのにほぼ適温の湯が自噴しているというのも愉快なことである。

野趣満点の露天風呂はいかにも夏のアウトドアの楽しみ方にも思えるが、しかし真夏は避けたほうがいい。思わぬ伏兵がいるのだ。それは「アブ」。  
この場所に限らないが、盛夏に郊外をドラ

イブしたり露天風呂を楽しもうとするアブの来襲でうんざりさせられた経験はどなたもお持ちだと思う。8月の某日、私も近くまで行ったついでにこの露天風呂に立ち寄り、他に誰もいないのを幸いに貸切状態で豪快な露天風呂を楽しもうとしたのだが、クルマを降りたとたんアブの猛攻撃で、とてもとてものもんびりと風呂につかっつけられるものではなかった。誰もいないわけだ。真夏向きの場所ではないとみんな知っているのだ。

秋田の暑い夏はもうしばらく続きそうだが、これから先、朝晩の空気がひんやりと感じられるようになったら、実はそこが本格的な露天風呂シーズンなのかもしれない。万物の霊長たる人間がアブごときに翻弄されるなどはなほだ不愉快なことであるが、季節をちよつとずらせばそんな些細な問題など克服できる知恵を我々は持っている。アブが秋になっても活動する知恵を持たないうちに、我々は秋の露天風呂を満喫することしよう。

## 館山崎のグリーントフと白岩

永井登志樹

男鹿半島の南海岸を男鹿の人びとは南磯と呼ぶ。私はその南磯の椿という漁村で生まれ、少年時代を過ごした。

集落のほぼ中央には、ヤブツバキが群生した小高い丘(能登山)があり、日本海側の自生ツバキ北限地帯として国の天然記念物に指定されている。そして、ここにはツバキのほかにもうひとつ、男鹿を代表する自然の記念物がある。集落の西側にのびる館山崎で見られる白から薄い緑色をした凝灰岩(ぎょうかいがん)の露頭(表土に覆われずに地層や岩石が地表に露出している場所)である。

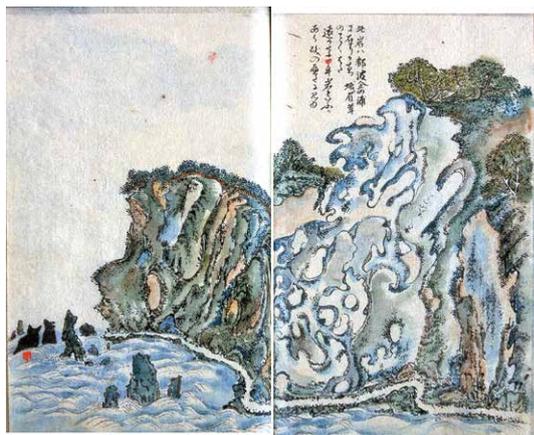
凝灰岩は、火山の噴火によって噴出した火山灰や火山レキ(噴火で生じた角ばった岩石の破片)などが固まってできた岩石で、このうち緑色をしたものは特にグリーン(=緑色)タフ(=凝灰岩)といい、館山崎はこの用語の発祥の地といわれている。

館山崎のグリーントフは、日本海側の新第三紀中新世の初期(およそ2300万年前~2100万年前)の模式的な地層として学術上大変貴重なもので、地学研究者が必ず訪れるフィールド、いわば研究者の聖地のような場所だ。

また、ここでは緑色の凝灰岩(グリーントフ)のほかに、「椿の白岩」と呼ばれている白色の凝灰岩も見られる。「椿の白岩」は、風化作用により表面がスプーンで削られたような独特の形をしている。今からおよそ200年前にここを通った旅の文人・菅江真澄は、これを「舞茸のようだ」「雨と潮に濡れてその色は青ばみ、異様に見えた」と旅日記に記し、絵も描いている。

白岩は晴れて太陽光があたっている時は白く輝いて見えるが、真澄が言う通り雨水に濡れると暗い緑色~青っぽくなる。グリーントフも嵐で潮風が吹き付けたりすると、一層深みの増した濃い緑色になる。普通は海岸の地層を観察するには晴れや曇りの日が適しているが、ここだけは雨の日の観察もおすすめできる。

菅江真澄は男鹿半島をめぐる著した「男鹿五風(ごふう)」と総称される5冊の旅日記を残しているが、これには文章だけでなく、たくさんの絵がはさまれているのが特徴で、よく見ると地層や岩石のようすがとてもよく描かれている。



菅江真澄の描いた「館山崎と椿の白岩」(秋田県立博物館蔵写本)

真澄は長い旅に出る前、本草学(主に薬用の観点から、植物を中心に動物、鉱物などを研究する学問。薬学、博物学)を学んでいたことがわかっている。そのため、博物学者の知識と自然科学者の眼を持ち合わせていた。館山崎を描いた絵は、真澄らしい観察眼でグリーントフの特徴をよくとらえているように思う。



館山崎のグリーントフ

ところで、男鹿半島は館山崎のグリーントフに代表される日本列島誕生の記録が残る場所であり、およそ7000万年前から現代までの地層が連続して観察できる、いわば「大地の博物館」ということができる。そのことが認められて、昨年9月に「男鹿半島・大潟ジオパーク」として東北で初めて日本ジオパークに認定された。

ジオ(GEO)は「地球、大地」という意味で、ジオパークとは、科学的に見て重要で貴重な地質遺産(地層、岩石、地形、火山など)が数多く点在する「大地の公園」のことをいう。その中には大地のうえに成り立っている自然、その土地の風土ならではの祭事や食べ物など、そこで暮らす人々が育んだ歴史や文化も含まれる。

ジオパークは、2004年にユネスコの支援で設立された世界ジオパークネットワーク(GGN)により世界各国で推進されていて、国内では20地域のジオパークが日本ジオパークネットワーク(JGN)を結成して活動中で、このうち洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸、室戸が世界ジオパークに認定されている(2012年8月現在)。

私は3年ほど前から、このジオパーク推進事業に関わるようになり、現在は「男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会」の一員であるNPO組織に在籍し、世界ジオパーク登録に向けた活動を行っている。

小学生のころ、夏休みの期間中に浜辺で遊んでいると、ハンマーを持った秋田大学鉱山学部(現工学資源学部)地質学部の学生らしい一団がやってきた。私は子供ながら何となく知的興奮を覚え、そのあとをついていき、館山崎で岩石を採取する学生たちの様子をよく眺めていた。彼らがいなくなったあと、家からカナヅチを持ち出してきて、岩石をたたきまねごとをしたりして、いっばしの地質学者?を気取ったりしたのも一度や二度ではなかった。

ただし、学校の先生を含めて大人たちから「グリーントフ」や「椿の白岩」の重要性、貴重さについて教えてもらった覚えはないように思う。ひとりで岩と戯れていたちょっと変わった子どもだったそんな私が、齢60の今ごろになって、「男鹿半島・大潟ジオパーク」推進に関わる仕事をしているのだから、人生とは不思議なものである。